

『悪魔のいけにえ』

1974年／アメリカ／トビー・フーパー監督作品

個性的な悪役と随所に光る工夫
魅力あふれるホラー映画

会員 木村 裕史 (63期)



『悪魔のいけにえ (THE TEXAS CHAIN SAW MASSACRE)』
価 格：4,700円＋税
発 売 元：NBC ユニバーサル・エンターテイメント
※ 2014年12月15日現在

1 注意と言いつ

本作はホラー映画である。そのため、ホラー映画に嫌悪感や不快感を感じられる方にはおすすめしない。

私も、せっかく由緒ある本コーナーに記事を書かせていただけのだから、「情婦」や「十二人の怒れる男」や「告発」など、法廷に関する名画を取り上げたかった。

しかし、敬愛してやまない元兄弁から、本作で記事を書いてほしいとの依頼をいただいたため、批判や不評を覚悟の上、やむなくこの記事を書かせていただく。

以上が言いつである。

2 あらすじ

テキサスの片田舎に、若い男女5人組がドライブにやってくる。途中でヒッチハイカーを乗せたが、ニコニコしながら刃物を取り出すなどし始めたため、そのヒッチハイカーを追い出す。その後、目的地に到着したが、道中でガソリンを買うことができなかったこともあり、まずは1組のカップルが隣家を訪れる。だが、その家は決して訪れてはいけない家だった。原題である「The Texas Chain Saw Massacre」な一日が始まる…。

3 魅力その1

上記あらすじからもおわかりのとおり、本作を見ても何か人生訓を得られたりするものではない。ただ、恐怖感と衝撃は得られるだろう。まさに、「Don't think. Feel!」(by ブルース・リー) である。

そして何より、以下のような魅力にあふれている。

本作の裏の主人公は、殺人鬼「レザーフェイス」である。人間の皮で自作したマスクを被り、汚れたエプロンを着用し、チェーンソーを振り回す大男である。趣味は、動物や人間の骨でアートを作ることのような。

レザーフェイスの次兄が「ヒッチハイカー」である。挙動がおかしいが、舌を出す仕草や手足をばたつかせるアクションなどがコミカルで、笑顔もかわいい。

また、長兄である「コック」や父である「じい様」も個性的である。コックは一見まともそうだが、弟たちの残虐行為を助長するやはり異常な男である。また、じい様は、顔面蒼白でミイラのような外見をしており、ほとんど動かないにも

かわらず、若い女性の血を吸うのは好きな怪人である。

このように、本作の悪役一家は、いずれも個性的である。また、妙に生活感や人間臭さがあるのも特徴である。例えば、レザーフェイスは、チェーンソーで自宅玄関ドアを破壊してしまったことをコックから叱られて謝ったり、チェーンソーでうっかり脚を切ってしまい痛そうにしたりする。また、コックは、機械化のせいで一家の仕事がなくなってしまったことを嘆いたり、「電気代も馬鹿にならないからな」などと言いながら電灯を消したりする。

悪役達の個性が、他のホラー映画にはない魅力となっている。

4 魅力その2

また、本作は、実はそれほど流血シーンや残酷なシーンを写していない。それにもかかわらず、本作が他のホラー映画以上に恐怖感を覚えさせるのは、監督の工夫によるところが大きいと思われる。

例えば、悪役一家に囲まれた女性が恐怖のあまり絶叫する際に、その女性の眼球をアップにするシーンがある。アップで写された眼球が小刻みに動くさまは、生理的に恐怖心が煽られる。

また、レザーフェイスが用いるチェーンソーは、エンジン音や破壊音などが生じるために、本作の凶器として採用されたように思われる。チェーンソーから発せられる様々な音が恐怖心を煽るのである。

5 最後に

ホラー映画といっても、単に大量の流血シーンや残酷なシーンを流し続ける作品は好みではない。本作のように、悪役が個性的であったり、色々な工夫をしている作品に惹かれるのである。

本作以外に好みの作品を挙げるとすれば、「ハロウィン」や「ナイト・オブ・ザ・リビングデッド」、「フェノミナ」あたりであろうか。趣は大分異なるが、「エイリアン」シリーズや「セブン」なども非常に面白い。

ホラー映画は低俗なものだと思う。それでも、ときにはホラー映画を見て、非日常的な刺激を受けることがあっていいのではないだろうか。